

東日本大震災 今できること

東日本大震災は、近世に類を見ない甚大な被害をもたらしました。地震、津波により尊い命を落とされた方、被災された皆様に衷心よりお見舞いを申し上げます。

これまでも被災地への様々な支援が行われていますが、時間の経過と共に支援の内容は変化します。急性期を過ぎ、生活再建や町の復興へ向けた大きな転換期を迎えました。よりきめ細やかな支援をスピード感をもって行うことが重要です。被災した地方自治体が、苦悩しながらも必至に対応している中で、国のスピード感の無さに憤りを覚えます。

しかしながら、公的支援には限界があり、民間の支援やボランティア活動による継続的な支援も必要です。自治体も支援の受入にもっと門戸を開くべきです。

私は、今回の震災を直視し、その大きな犠牲により残された教訓を肌で感じる事が重要と考え、5月に4日間の各被災地の調査活動を行いました。



がんばろう
東北

大船渡駅前通り付近

■ 大船渡市

大船渡市街駅前通り 道路のがれきは撤去されたものの津波被害の状況を色濃く残す街並に、津波避難誘導表示の描かれた街路灯がねじ曲げられた悲しい景色。災害発生の子知、防止はできないが、最大限の被害想定に基づく減災対策の充実強化と市民の意識啓発が重要です。



大船渡市災害ボランティアセンター

■ 支援物資

相模原市が管理を担当している、大船渡小学校体育館の支援物資倉庫。本市から5名の職員が交代で派遣されている。

支援物資には消費期限の短いものや、諸外国からの支援物資に馴染めないなどの課題が。個人からの詰め合わせ支援物資は、開箱して種類分けの作業に大きな時間を要する。カイロなど季節商品の在庫が残っている。子供用の紙おむつには、メーカー指定の要望がある。古着の需要がないなど様々な課題があり、支援自治体や、団体での工夫の必要性を確認した。



大船渡小学校支援物資倉庫

■ 災害ボランティア

今回の調査の大きなポイントは、災害ボランティアの受入体制の確認でした。一人でも多くのボランティアが必要な時、市外、県外ボランティアの受入に積極的ではないと聞く岩手県の状態を調査した。大船渡市での課題は、宿泊先と移動手段。沿岸部の被害により宿泊施設が無い。テント泊の場所が無い。車中泊の防犯対策。多数のボランティアを活動地への移送するための車両の不足など。ボランティアの側には、高額となる交通費が重い。行政支援が必要。

■ 気仙沼市



国交省設置の津波監視カメラ

■ 陸前高田市



市街中央の県立高田病院付近

■ 石巻市



戸建て住宅に被害の大きい北部

■ 名取市



被害の大きい関上地区

■ 亶理町



亶理町災援ボランティアセンター

今、被災地支援 災害ボランティア として避難所へ

6月18日から20日まで、大船渡市赤崎地区の避難所へ5名で支援活動に伺いました。この地区は、漁業集落で地域のまとまりが良く、過去の津波被害を教訓に災害対策訓練を積んで来たそうです。

赤崎地区は市内でも大きな津波被害を受けましたが、死者4名と他地区に比べて極めて少なかったことは、過去の津波教訓を生かした効果の表れと考えます。避難者から「命を守るためには、訓練をバカにしてはいけません。身体で覚えることが必要。」と聞きました。

今回は、津波で流され、その後拾い集められた写真などの洗浄と整理を担当しました。被災者各々の、大切な人生の思い出を何とか再生してあげたいと思いながらの活動でした。



大船渡市災害ボランティアセンター



ボランティアステッカー

災害ボランティア活動

1. 災害ボランティアセンターで登録

この日は、各地から駆けつけた、団体、個人など約50名が活動登録し、倒壊の泥上げ、自宅の片づけ、支援物資の仕分けなどに向った。1ヶ月をこえる長期から1日だけのスポット支援まで、様々な関わり方がある。

ボランティア活動では、ボランティア登録証明を貼付することとなっている。一般的には、紙カードの証明書が発行され、ガムテープに氏名を書いて貼るのが一般的だが、ボランティアを装った犯罪者も発生している中で、岩手県が統一したステッカーを作成し、使い出したことは意味がある。

2. 災害ボランティア活動（今回は、写真洗浄作業を担当）



泥や塩にまみれた写真をぬるま湯に浸け、筆で丁寧に泥や塩を流し、清水で洗浄後、陰干し、拾い集められたものを整理しながら作業を進める。ひとつ一つが被災者にとって大切なもの。



写真以外にも、卒業証書や、通帳などが混在する。



●災害ボランティア活動については、「全国社協」のホームページをご確認下さい。また、ご連絡いただければ、現地情報を提供させていただきます。

赤崎地区避難所周辺の様子



赤崎地区避難所(漁村センター)



地区自主防災本部



津波避難マップ



津波記念碑

明治三陸大津波(1896年)、昭和三陸地震津波(1933年)の被害を記した記念碑。

碑には、「地震があったら津波の用心 津波が来たら高い所へ」の教訓が刻まれている。

赤崎地区避難所の設備状況



仮設（3室を約100名が利用、占有空間の仕切がない。）



定期的に開設される診療所



仮設シャワー室（温水）



トイレは水洗だが、ペーパー類は流せない。



仮設浴室（男女別）手前のドラム缶ボイラーで薪を燃す。ビニールハウスの骨を利用。



浴室内部（鉄パイプで組み、ビニールシートを張った浴槽。更衣スペースは通路に）

おおつき和弘は、災害に強い安全安心まちづくりを進めます。